

|                  |                                                                                                                                                                             |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>Title</b>     | 巻頭言 特別な一日                                                                                                                                                                   |
| <b>Author(s)</b> | 谷口, 隆一郎                                                                                                                                                                     |
| <b>Citation</b>  | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.3, 2016.3 :3-3                                                                                                                              |
| <b>URL</b>       | <a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5745">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5745</a> |
| <b>Rights</b>    |                                                                                                                                                                             |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 特別な一日

ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニ主演の名作「特別な一日」を観た。感動した。

第2次大戦が始まろうとしていた1939年5月3日、ローマを訪れたヒトラーを歓迎するパレードで沸き立つ記念すべき日。市民のほとんどが広場へ出かけた。ムッソリーニ率いるファシスト党政権下のイタリア。

アントニエッタは、6人の子供を持つ主婦。夫は、妻に子供たちの面倒を任せ、浮気や友だちづき合いに忙しい。夫と子供たちを見送り静まりかえった高層アパートに一人残されたアントニエッタ。この平凡な主婦は、ペットの九官鳥が向かいのアパートに飛んでいったことをきっかけに、そこ住む男性と知り合う。男はガブリエレと名乗った。当局から同性愛者の疑いをかけられ、離島に送られるのを待っている。孤独と失望のあまり自死を試みたガブリエレにとって、自分のところに迷いこんできたアントニエッタとの時間が特別な時となっていく。そうだとはいふとも知らないアントニエッタも、知的でどこか悲哀を秘めた彼に次第に惹かれていく。ついに彼女は彼におもむろに抱きつく。しかし、暗然たる表情を浮かべてガブリエレは彼女を自分から離してしまう。

「男なんて、みんな同じよ（女を弄ぶだけ）」「ほくは違う。ほくはホモなんだ」

思いがけない告白に狼狽するアントニエッタ。だが、アパートに戻って心が静まると、いつも侮辱をうけてきた男の心が彼女には痛いほど感じられるのであった。彼女も同じように、冷たい夫との生活の中、そして家族の世話をするだけの、時々「家族の数にすら入れられていない」と感じる生活の中で、知らぬ間にひとりの女として侮辱を受けていたのだ。

彼女は彼のもとを訪れ、互いに<sup>いたわ</sup>り合うように愛しあった。この特別な日に、二人は特別の時を過ごしたのだ。ファシズム賛美の歓喜を実況放送するラジオの音が、外から鳴り響いていた。

いつものように家族と夕食を済ませた後、窓辺に佇むアントニエッタ。見下ろすと、そこには連行されていくガブリエレの姿があった。……

戦争が二人の個人としての尊厳を傷つけたのだという観点でこの作品を観るのは<sup>ばか</sup>莫迦げていよう。人間は、平和な時代であっても、自尊心や屈辱の日常を送っている。戦争に直面していなくとも、大衆社会においては大多数の歓喜と歓声に掻き消されるかのように、個人の自尊心が傷つけられる。このような状況をトクヴィルは「多数者の専制」と呼んだ。民衆主義は近代市民社会の陥穽である。

もちろん、ファシズム体制下では人権が過酷なまでに抑圧される。だが、人権を至上命題に振りかざし、伝統や文化という、個々の国柄（人に人柄があるように、国にも国柄がある）に関わる事柄や、あるいは敗戦以前において父祖たちが行ったことを今のモラルや価値観で一方的に断罪するのも卑にして陋である。

人間は、戦争のような、抗えない強大な状況は当然のこと、それほど強大でなくとも自らはどうすることもできないほどの、一個の人格とその生を限定する<sup>さが</sup>性の局面に、常に自らをおいて生きざるを得ない。それが現実である。

この映画では「個人」の側の自負心と屈辱という局面に焦点が当てられてはいる。だが、恐らくこれら二つの局面それぞれの側で自負心と屈辱があるに違いない。

しかし、人間は、動もすれば、どちらか一方の局面を至上命題に振りかざして、他方の局面を裁断しようとする傾きにある。赤の他人同士のアントニエッタとガブリエレの場合、ファシズムの歓声という、（今日振り返ってみれば）異様な状況の下でさえ、些細なきっかけから「特別な時」を共に過ごす局面に巡り会えたのだ。

両局面の数奇な交錯において展開する「特別な一日」。